

# 新潟県内の海揚がり陶磁器

## —『日本海に沈んだ陶磁器』その後—

竹 部 佑 介・田 海 義 正

### はじめに

新潟県域の海中から引き揚げられた土器等の文化財を調査するために、平成 23（2011）年に「新潟県海揚がり陶磁器研究会」が結成され、両名<sup>1)</sup>も参加した。この活動でそれまで知られていた海揚がり品と新知見の資料をまとめた報告書『日本海に沈んだ陶磁器』（以下、報告書）を平成 26（2014）年に刊行し、縄文時代から近代に至る計 206 点の海揚がり品が報告された〔寺崎ほか 2014〕。県下ではこれに先行して、海揚がり品の報告・集成が行われており、珠洲焼が数多く含まれることが明らかとなっていたが〔寺村・久我 1960、室岡 1972、金子・高橋 1977、戸根 1991 など〕、報告書においても珠洲焼が 109 点と半数を超える傑出した状況であることが改めて確認された。

報告書の刊行後にも海揚がり品の情報が断続的に寄せられており、これまでに 2 件の報告がある。以下に示す通り、2014 年以降に新たに引き揚げられたものばかりではなく、これまで明らかにされていなかった揚陸年代の古いものも含まれる。

「長岡・出雲崎地域で新たに確認された海揚がり品」〔加藤ほか 2018〕

4 点の資料が報告された。古墳時代前期の土師器甕は、出雲崎沖で平成 28 年に揚げられた。須恵器中甕は柏崎市米山沖で引き揚げられたと伝わる。佐渡市の小泊窯跡群産で時期は 9 世紀後半から 10 世紀初頭のものと考えられる。大正時代から戦前までに揚げられたとみられ、昭和 11（1936）年<sup>2)</sup>発行の新聞に包装されていた。珠洲焼片口鉢は寺泊沖の水深約 300 m のタラバから昭和 25 年に引き揚げられた。本資料は『寺泊町史』に掲載されたが、研究会の調査時には所在確認できなかったものを改めて実測、写真撮影した。吉岡編年Ⅱ～Ⅲ期に比定される。唐津焼小型甕は寺泊一佐渡間から戦前に引き揚げられたという。18 世紀第 4 四半期以降の所産とみられる。同時に大甕も 1 点引き揚げられたが所在は不明である。

「新潟県名立沖海揚がり備後尾道の酢徳利」〔田海 2019〕

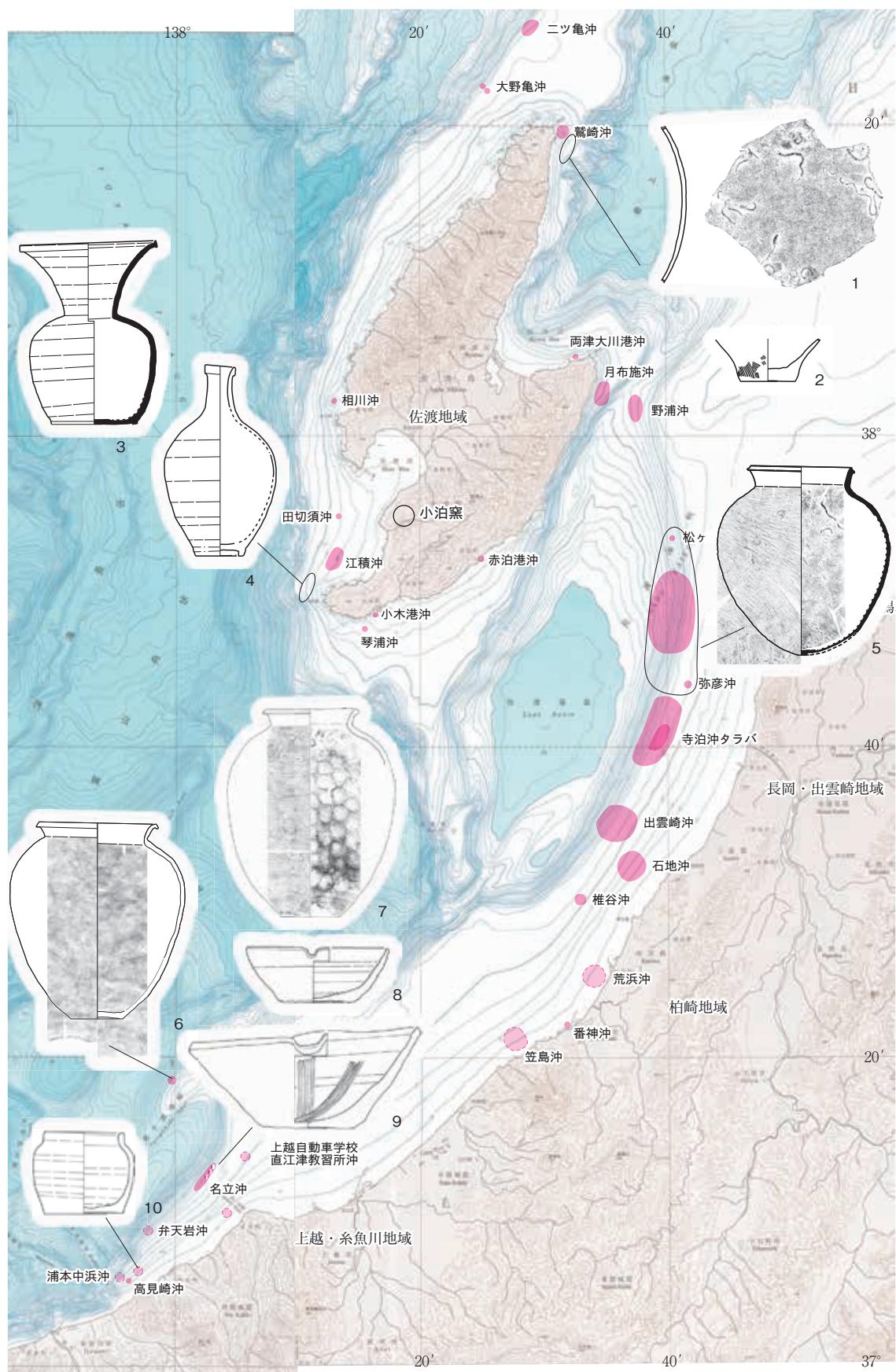
平成 30（2018）年 6 月に上越市名立沖の水深約 600 m から甘えび漁の底引き網で徳利 1 点が引き揚げられた。それは広島県尾道市にあった造酢所<sup>3)</sup>が幕末に創業した福山市の鞆皿山窯に注文した酢徳利でヲノミチヘ（やま）ヲと描かれている。明治時代前半のものと考えられる。

本稿では上記 2 件の報告以外で、報告書刊行後に新たに引き揚げられた土器・陶器や同報告書の資料調査時に把握できなかった既存の海揚がり品を含めた 10 点（第 1 図）を報告する。以下、珠洲焼の年代観については吉岡康暢氏の編年〔吉岡 1994〕を用いる<sup>4)</sup>。遺物実測は寺崎裕助氏、鹿取涉氏、竹部佑介、田海義正が分担した。遺物写真は 1～4 を鶴田浩規氏（フォーカル）、5～10 を田海が撮影した。

### 1 資料報告（第 1 図～第 3 図）

#### （1）佐渡博物館所蔵資料（佐渡沖）（第 2 図 1～4）

1・2 は弥生土器の壺甕類である。1 は球胴になり、最大径付近の破片と考えられる。内外ともハケ調整され、内面にはナデ痕も認められる。2 は平底の底部で、中央付近がわずかに凹む。底径 7.4 cm である。



(寺崎ほか2014を基に加筆)

### 第1図 揚陸地点の位置

元図:海上保安庁 海底地形図 能登半島東方 平成12年、佐渡海峡付近 平成14年を部分引用・縮尺  
遺物縮尺 5・6・7・=1:12、他=1:8



第2図 遺物実測図・写真(1~6)

外面はハケ、内面はナデ調整される。2点とも色調・胎土の特徴が類似する。外面は明黄褐色、内面は浅黄橙色で、石英・長石を多く含み胎土は粗い。また、内外面に生物付着痕跡（カンザシゴカイ科棲管）が満遍なく付着する。1の器面には、昭和59年2月24日に「鷺崎沖 約3km沖」にて採集されたと注記されている。2は1の20日前の昭和59年2月4日に「鷺崎沖」で採集されたと注記される。詳細は不明ながら、調整・胎土の類似性などから、同一個体の可能性が考えられる。

3は須恵器長頸壺である。口径18.2cm、器高（24.7cm）、底径11.7cmで、口縁部を一部欠損する。高台は短く、研磨されたような平滑面が見られるため、後世に改変された可能性も考えられる。ロクロ成形で、口縁部は大きく開く。口縁端部は内傾する面を持つ。胎土は灰黄色で、黒色の溶出物が多い。内外面共に生物付着痕跡が満遍なく認められる。カンザシゴカイ科の棲管が主体であり、頸～胴部にフジツボ殻がある。小泊窯跡群の10世紀初頭頃のものである。本資料は昭和61年4月に地元漁師によって「小木沢崎燈台二〇〇〇米沖あい」（収蔵時メモ原文ママ）で採集された。「沢崎燈台」は佐渡市沢崎の沢崎鼻灯台を指すと考えられる。4も同一漁師によって同一地点・同一時期に発見されており、合わせて郷土史家の本間俊夫氏によって収集された。佐渡市大字真野の「民具の家まのんさわ」に収蔵されていたが、現在は佐渡博物館に所蔵されている。本資料は橋本博文氏によって、小泊産長頸壺Bとして資料報告がなされている〔橋本2009〕。今回の報告にあたって、新たに実測を行い図化した。

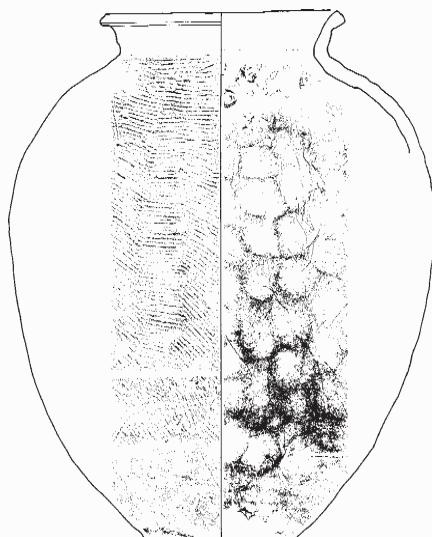
4は陶器焼酎徳利である。口径4.0cm、器高25.7cm、底径6.2cmで完形である。口縁部は突帯が巡り、頸部は長い。口縁部の突帯幅は1.2cmである。胴部は長胴で上半に最大径がある。ロクロ成形で、外面及び高台内には灰釉が施される。胎土は褐色である。口縁部から胴部上半にかけて生物付着痕跡（カンザシゴカイ科）が認められる。痕跡は口縁部～頸部に密であり、胴部下半にかけて疎らになる。本資料は昭和61年4月に地元漁師によって小木沖「沢崎燈台二〇〇〇米沖あい」（収蔵時メモ原文ママ）地点で採集された。前述の通り、3と共に佐渡博物館に収蔵されている。

## （2）潟東歴史民俗資料館所蔵資料（新潟沖）（第2図5）

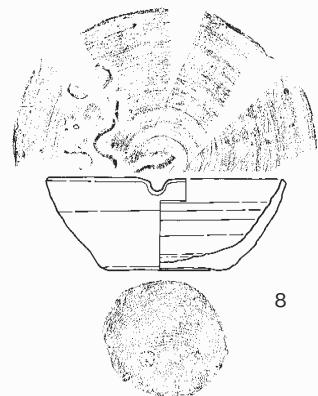
5は須恵器甕である。口径20.4cm、器高38.4cmで、底部は丸底である。底部付近は表面が一部剥離している。外面は平行叩きで、頸部では重複して施されており格子目状となる。内面は放射状叩きの後、粗雑なナデ消しが施され、下半は平行叩きが認められる。色調は黄灰色で、胎土は空隙が多くやや粗い。内外面に生物付着痕跡（カンザシゴカイ科棲管、カキ殻）が認められる。胴部の付着状況には偏りが見られ、例えば横倒しの状態であったなどの埋没状況を反映していると考えられる。本資料は、器面に「昭和初年新潟沖」の注記がある。関雅之氏によって、谷川忠壽美氏寄贈資料として報告されている〔関2000〕。今回の報告にあたって、新たに実測を行い図化した。

## （3）日向神社所蔵資料（名立沖）（第2図6）

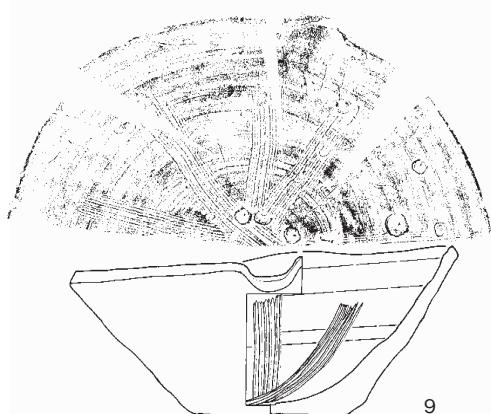
上越市名立区日向神社の6は珠洲焼叩き中壺である。口径23.4cm、器高40.2cm、底径10.6cm、完形である。口縁部は断面「く」字状で端部は嘴状に引き出される。胴部は肩が張り、底部に向けてすぼまる。外面は肩から胴部下半まで右下がりの平行叩き目が認められる。底部は、静止糸切痕がナデにより不明瞭となる。形状から吉岡編年（以下、吉岡と記す）Ⅱ期に比定される〔吉岡1994〕。本資料は、地元漁師により昭和41（1966）年頃、名立沖の「甘エビ漁場、水深600m」地点から引き揚げられた。生物付着痕跡は確認できなかった。同一地点からはこれまでにも、珠洲焼水注が発見されている〔寺崎ほか2014、上越・糸魚川地域名立沖32〕が、付着痕跡の微弱なものは同海域としては例外的な存在である。なお、同時期、同意匠の叩き中壺が出雲崎沖から発見され報告されている〔寺崎ほか前掲、長岡・出雲崎地域出雲崎沖44〕。



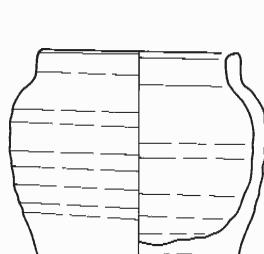
7



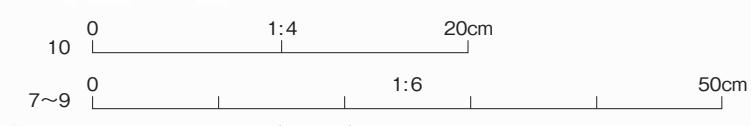
8



9



10



第3図 遺物実測図・写真(7~10)

#### (4) 長養館所蔵資料（名立沖）（第3図7）

7は珠洲焼叩き中壺である。口径17.8cm、器高42.0cm、胴部最大径34.0cm、底径11.6cm、完形である。口縁部は断面「く」字状で端部は面を持つ。胴部は中央よりやや上が張り、底部に向けてすぼまる。外面は肩から胴部下半まで綾杉状の叩きが右側はほぼ水平で階段状となる。肩部に円形竹管が並んで2つ捺されている。底部は静止糸切り、乾燥台の直線状筋が残る。器色調は暗灰色。口縁部3分の1に光沢がある。外面に褐色付着物が付く。外側の貝殻などは削り落とされ痕跡が残る程度だが、肩内部にはカンザシゴカイ科棲管が残る。焼成良好である。吉岡IV期に比定される。

所蔵者の上越市寺町2丁目の長養館吉原耕一社長の話では、名立沖から揚がったと伝えられ、昭和15（1940）年以前には所有されていたと考えられる。名立沖の珠洲焼は昭和30年代に相次いで揚陸されるようになつた〔室岡1972〕。名立沖から昭和15年以前に引き揚げられたことは同地では最も早い珠洲焼の発見とみられる。

#### (5) 個人蔵資料（名立沖）（第3図8・9）

8は珠洲焼小型片口鉢で口径18.5cm・器高7.4cm・底径9.5cmを測り、完形品である。色調は青灰から灰色で焼成は堅緻。外面は茶色から褐色の色染みがある。片口は指幅1本分引き出される。片口部は正面から観て右側に寄り、右利きがうかがわれる。内面に卸目はない。焼成は堅緻である。底部は静止糸切のままである。内面の半分と外面ほぼ全面にカンザシゴカイ類棲管と貝殻がある。

9は珠洲焼片口鉢で口径30.0cm、器高11.3～13.5cm、底径12.0cm。焼成は良からやや甘い。外面と口端部は風化が進む。外面の色調は灰色、底面は黄色。内面は薄茶色に汚れが沈着する。外面の6割くらいには貝の付着はなく、内面にはまばらに貝殻がみられる。卸目は11目一単位の底で途切れることなく4本が交差し、放射状に8条が入る。底面は静止糸切後ナデ調整される。片口は指幅2本分引き出される。8、9は吉岡II期に比定できる。

8と9の所蔵者は同じで2017年の聞き取りによると「4～5年前に親戚から託された。引き揚げ地点は名立沖ではないか。」との話であった。

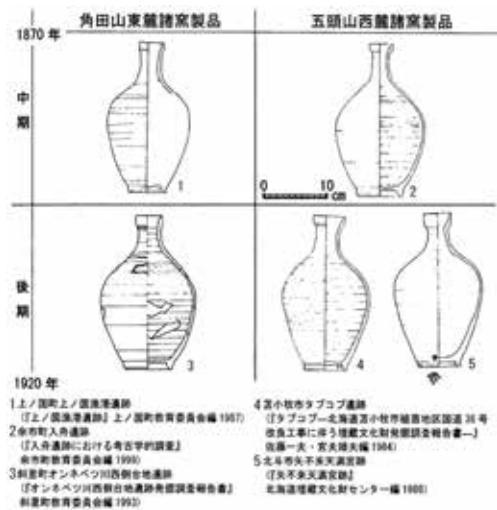
#### (6) 個人蔵資料（高見崎沖）（第3図10）

10は越中瀬戸焼広口壺で平成30（2018）年6月、糸魚川市鬼伏の高見崎沖水深約60mから引き揚げられた。口縁部に細かな欠けや胴部にヒビが入るがほぼ完形である。口径9.4cm、器高11.1cm、底径10.6cm。胴部上半に最大径（13.6cm）を持ち、頸部が窄まり口縁は直立する。口唇部には重ね焼きの融着痕が残る。底部には回転糸切り痕が見られる。回転方向は右方向である。全面に鋸釉が掛けられ赤褐色を呈するが、火裏の表面は灰から灰黒色である。胎土は淡黄灰色でやや粗く石英砂から小礫が多く入り、器面にも目立つ。17世紀後半の生産とみられる。この高見崎沖では本例が3例目の越中瀬戸焼（広口）壺である〔寺崎ほか2014〕。

## 2 資料の考察

### (1) 焼酎徳利

4は形状・釉調から越後産の焼酎徳利と考えられる。越後産の焼酎徳利については、窯跡・消費地の集成から生産・流通の実態に迫った研究があり、角田山東麓産製品（松郷屋焼など）と五頭山西麓産製品（笛岡焼など）の型式的分類と時期的変遷についての検討が行われている。両生産地に見られる差異として、口縁部突帯の幅や釉調の違いが挙げられている。角田山東麓産製品では口縁部突帯幅が1.8cmを下回るもの



第4図 越後焼酎徳利の変遷  
(関根・木戸2018より転載・レイアウト改変)

西麓における焼酎徳利の生産は、旧笛岡村の小林新次郎が慶応3（1867）年に開始したことが契機とされており [石黒1913]、以後、需要の高まりとともに当該地域における焼酎徳利の生産が拡大した。消費地における当該地域製品の増加傾向は、この生産拡大を受けた結果であることが明らかとなっている（関根・木戸前掲）。北方地域における両産地の比較を行う場合、口縁部突帯幅に伸長が見られる「後期」における五頭山西麓産製品の資料増加が影響するため、口縁部突帯幅のみを両産地の識別根拠とすることは難しい。そのため、産地同定のためには産地資料の収集が課題である。

ここで、産地→消費地への流通ルートについて検討を加える。焼酎徳利4について考えるならば、その揚陸海域は小木、沢崎鼻灯台沖である。そのため、仮に新潟湊から積み出されたものであれば産地→消費地（北方地域）の直線上には存在しない。産地が角田山東麓であれ五頭山西麓であれ、揚陸地点には疑問が生じる。当該海域の近世における肥前陶磁器回漕ルートについては、安藤正美氏によって「①越中伏木から今町→柏崎→出雲崎→新潟、②能登から小木→新潟、さらに③今町、柏崎→小木→新潟」の3パターンが挙げられており [安藤2014]、新潟-小木間の回漕ルートの存在や地廻り廻船等の役割を考慮に入れると、4は新潟湊から直接、北方地域へ向かうことがなかった個体である可能性を積極的に考えたい。今後、同種の資料が増加することに伴って、地廻り廻船を中心とした地域内流通ルートの復元に繋がることが期待できる。

## （2）珠洲焼の中世遺跡との比較

文化財保護法の対象となる新潟県内の遺跡は、13,243か所あり（新潟県教育庁文化行政課資料2020年5月現在）、そのうち石仏や石塔類を除いた中世遺跡は2,551か所が「新潟県埋蔵文化財包蔵地調査カード」に登録されている。県内の中世遺跡からは、上越市仲田遺跡 [加藤ほか2003] で集落跡の井戸から吉岡I期の珠洲焼が出土した。また、上越市清水田遺跡の井戸SE55から赤彩痕を留める吉岡I期の珠洲焼水注あるいは壺が出土した [佐藤ほか2015]。また、新潟市山木戸遺跡では12世紀後半から13世紀前半の集落から珠洲焼のI期の資料がまとめて出土した [新潟市1994]。この他、上越市伝至徳寺遺跡 [鶴巻・水澤2003]、中条町下町・坊城遺跡 [水澤2001] などからも少数ではあるが発見されている。このように12世紀後半を中心とした初期の珠洲焼製品が出土した遺跡がありつつも、以下に例を挙げるよう陸上の遺跡においては時期が下るにつれ珠洲焼の供給量が増加する傾向が窺える。

のが多く、鉄釉と藁灰釉が重ね掛けされる。五頭山西麓産製品では口縁部突帯幅が1.8cmを超えるものが多く、灰釉、稀に鉄釉が施されるとされる。時期が下るにつれ、両産地とも口縁部突帯幅の伸長、短頸化、長胴化が進むと指摘されている。[関根・木戸2018]。

本資料は口縁部突帯幅が1.2cmと細く作出されており、頸部は細く長く伸びる。具体的な窯場を特定するまでは至らなかつたが、その形態的特徴から1870年以後の「中期」に帰属するものと考えられる。

北方地域（青森県・北海道・サハリン島・千島列島）における分布調査では、1870年頃を画期として、角田山東麓産製品による卓越状況から徐々に五頭山西麓産製品への転換が進むとされる（関根・木戸前掲）。五頭山西麓

の多くの鉄釉と藁灰釉が重ね掛けされる。五頭山西麓産製品では口縁部突帯幅が1.8cmを超えるもの多く、

灰釉、稀に鉄釉が施されるとされる。時期が下るにつれ、

両産地とも口縁部突帯幅の伸長、短頸化、長胴化が進む

と指摘されている。[関根・木戸2018]。

本資料は口縁部突帯幅が1.2cmと細く作出されており、

頸部は細く長く伸びる。具体的な窯場を特定するまでは

至らなかつたが、その形態的特徴から1870年以後の「中期」に帰属するものと考えられる。

北方地域（青森県・北海道・サハリン島・千島列島）

における分布調査では、1870年頃を画期として、角田

山東麓産製品による卓越状況から徐々に五頭山西麓産製品への転換が進むとされる（関根・木戸前掲）。五頭山西麓

の多くの鉄釉と藁灰釉が重ね掛けされる。五頭山西麓産製品では口縁部突帯幅が1.8cmを超えるもの多く、

灰釉、稀に鉄釉が施されるとされる。時期が下るにつれ、

両産地とも口縁部突帯幅の伸長、短頸化、長胴化が進む

と指摘されている。[関根・木戸2018]。

本資料は口縁部突帯幅が1.2cmと細く作出されており、

頸部は細く長く伸びる。具体的な窯場を特定するまでは

至らなかつたが、その形態的特徴から1870年以後の「中期」に帰属するものと考えられる。

北方地域（青森県・北海道・サハリン島・千島列島）

における分布調査では、1870年頃を画期として、角田

山東麓産製品による卓越状況から徐々に五頭山西麓産製品への転換が進むとされる（関根・木戸前掲）。五頭山西麓

の多くの鉄釉と藁灰釉が重ね掛けされる。五頭山西麓産製品では口縁部突帯幅が1.8cmを超えるもの多く、

灰釉、稀に鉄釉が施されるとされる。時期が下るにつれ、

両産地とも口縁部突帯幅の伸長、短頸化、長胴化が進む

と指摘されている。[関根・木戸2018]。

本資料は口縁部突帯幅が1.2cmと細く作出されており、

頸部は細く長く伸びる。具体的な窯場を特定するまでは

至らなかつたが、その形態的特徴から1870年以後の「中期」に帰属するものと考えられる。

例えば12～16世紀と長い存続期間が明らかになっている胎内市下町・坊城遺跡では、珠洲焼片口鉢の時期別点数を以下のように報告している。吉岡Ⅰ期22点、吉岡Ⅱ期21点、吉岡Ⅲ～Ⅳ前期39点、吉岡Ⅳ後期～Ⅵ期160点である。14世紀末に坊城館から江上館への機能移転が行われたことと連動して、吉岡Ⅳ後期以降の遺物は建物に伴わないしながらも、14世紀後半以降の珠洲焼供給量が増加している状況が窺える〔水澤2005〕。また水澤氏は、14世紀前半の建物（珠洲焼6点出土）と15世紀の溝（珠洲焼237点出土）を比較して、15世紀段階では「珠洲の量が格段に増えており、家財の充実を物語る」〔水澤前掲〕とする。

しかし、県内の海揚がり品に関しては、陸上とは異なるあり方が窺える。2014年時点の報告書に拠ると、県内で確認された珠洲焼109点のうち、吉岡Ⅰ期16点、Ⅱ期68点、Ⅲ期10点、Ⅳ期12点、Ⅴ期1点、Ⅵ期2点となる〔相羽2014〕。Ⅰ期とⅡ期で84点と珠洲焼の77%を占め、Ⅳ期以降が15点（14%）と少ない点が対照的である。点数の多い寺泊沖、名立沖を代表海域として限定して見ても、両海域とも確認点数40点の内、寺泊沖では28.5点<sup>5)</sup>（71%）、名立沖では26点（65%）が吉岡Ⅱ期に比定され<sup>6)</sup>、珠洲焼生産における早い段階の製品の出現率の高さが窺える。

陸上の遺跡では中世後期に存続する遺跡には14世紀以降も珠洲焼の供給は行われており、遺跡によつては増加する傾向が見られる中で、海揚がり品では吉岡Ⅳ期以降の遺物が際立って少ないという点に特異性があると言わざるを得ない<sup>7)</sup>。

ここで、今回の新出資料を含め、揚陸海域との関連性について触れておきたい。今回の新出資料では、6は他の珠洲焼と同地点で引き揚げられたことが明らかになっている。2014年の報告時にも「狭い範囲で引き揚げられていることから一括性は高く、該期の沈船の可能性が強く示唆される」〔相羽2014〕とされたように、海揚がり品の帰属時期における偏重は、揚陸海域が限定的<sup>8)</sup>であることを合わせて考えなければならない。また、前回の報告書において検討した通り、各海域における珠洲焼に見られる加飾法は限定される傾向が窺える<sup>9)</sup>〔竹部2014〕。以上のことから、海揚がり品の珠洲焼について、揚陸海域及び揚陸海域毎の加飾法が限定され得る。先の帰属時期における特異性と合わせて、一括して海中に没した可能性を考えられ、要因としては沈船の存在が想起される。

### 3 結び

近年は新出資料が引き揚げされることもあるが、歴年の漁業活動によって海底地形は著しい改変を受けしており、仮に沈船が存在したとして、その状態は往時を保っているとは言い難い。新潟県の海底遺跡としては、県の埋蔵文化財包蔵地カードに拠れば、長岡市「寺泊沖タラバ」、「順動丸」、出雲崎町「出雲崎沖」、柏崎沖「椎谷沖海底」、上越市「名立海底」の計5か所が登録されているが、その保存の在り方については今後の課題となっている。また現状では、吉岡Ⅰ期の資料がまとまって揚陸した粟島沖・粟島～佐渡沖や、縄文土器・弥生土器・須恵器を含む新潟地域（角田沖・間瀬沖・弥彦沖）が遺跡登録されていない。海揚がり品自体も、2014年時点で散逸してしまっていた遺物もあった。今後の資料増加に期待する一方、散逸を防ぐ方法も課題である。さらに海揚がり品の調査を継続したいと思う。

最後に、この報告に際し多くの方々や組織にご協力を賜った。深く感謝し御名前を留めたい。（敬称省略）

相羽重徳 磯谷光一 春日真実 鹿島昌也 加藤由美子 鹿取渉 九千房百合 久保田敏正

佐々木達夫 佐藤忠彦 滝川邦彦 竹内竹司 鶴田浩規 中島栄一 寺崎裕助 二宮正守 吉原耕一

潟東歴史民俗資料館 佐渡博物館

## 註

- 1) 竹部佑介 ((株) 大石組)、田海義正 ((公財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団)
- 2) 報文では「昭和元年」となっているが、正しくは昭和 11 年である。
- 3) ヲノミチ銘酢徳利は尾道の稻田伊兵衛商店の製品である。研究紀要 10 号では大正 7 年に合併し、「尾道造酢」を設立とした。その後、同社から稻田伊兵衛商店は創業には参加していないと指摘があった。この場を借りて訂正したい。
- 4) 吉岡氏の編年は「第三節 基準資料の検討と暦年代」(p360 ~ 392) によると以下の通りとなる。I 期は（若山荘成立）～1200 年代、II 1 期は 13 世紀第 1 四半期・II 2 期 13 世紀第 2 四半期、III 期は 13 世紀中葉～1270 年代、IV 1 期 1280 年～1310 年代・IV 2 期 1320 年～1350 年代・IV 3 期 1360 年～1370 年代、V 期 1380 年～1440 年代、VI 期 1450 年～1470 年代、VII 期は消費地に出回らず 15 世紀第 4 四半期に珠洲窯は廃絶する。
- 5) 複数時期にまたがる個体を各時期に配分した結果、個体数には小数点が含まれる。
- 6) 名立沖では 26 点が吉岡 II 期に比定された。吉岡 II 期とした個体のうち、一部については吉岡 III～IV 期まで時期が下る可能性があるが、ここでは大勢に与える影響は少ないと判断できる。
- 7) 勿論、遺物の時期別出土量は遺跡の存続期間によって異なる。例えば、新発田市住吉遺跡は、存続期間は珠洲焼生産の前半段階にあたる 12 世紀末～14 世紀前半であり、吉岡 II 期 6 点、吉岡 II～III 期 3 点、吉岡 III 期 6 点、吉岡 III～IV 期 7 点、吉岡 IV 期 5 点が報告されている。合計 27 点であり、出土個体数が「30 前後」とされているため、ほぼ当遺跡の傾向が掴める [高橋ほか 2006]。上記の通り、遺跡単体では中世遺跡といえども、一概に吉岡 IV・V・VI 期の出土量が増加するとは言えない。しかしながら、県内の中世遺跡を概観すると、吉岡 IV 期以降の珠洲焼が減少する傾向にあるとも言えず、海揚がり品においては明らかに吉岡 IV 期以降の遺物量が減少傾向にあり、その対照的な状況がうかがえる。
- 8) ただし、揚陸海域の限定的な状況には、漁場の位置が大いに関係する。海揚がり品は、漁場に埋没していたため揚陸する機会を得た。これまで新潟～寺泊～出雲崎沖、名立沖では水深約 150～200 m の大陸棚縁辺部に遺物が集中することが明らかになっている。この遺物集中域は元々「タラバ」と呼ばれる優れた漁場であった。遺物の揚陸する機会は必然的に高かったと言える。水深は違えども、名立沖の甘エビ漁場水深 600 m からは珠洲焼水注 (2014 年報告)・珠洲焼叩き中壺 (本稿 6)、近代酢徳利 (田海 2019) が揚がっており、網が入る機会の多さが遺物量に繋がっている。これに対して、網が入る機会が少なかった海域においては、遺物の揚陸する機会が少なかったと言える。つまり、これまで明らかになっていないだけで、例えば吉岡 V・VII 期の沈船が存在する可能性は否定できない。
- 9) 新発田市住吉遺跡では、吉岡 II 期の片口鉢の中に、内面に横位の櫛目文を加飾する個体が報告されている [高橋ほか前掲、報告 69]。また、下町・坊城遺跡 A 地点では、吉岡 II～III 期の片口鉢として、内面に横位の波状櫛目文を加飾する個体が報告されている [水澤 1999、報告 169]。2014 年に報告したように、寺泊沖～弥彦沖では II 期の片口鉢に横位の櫛目文を施す一群が存在する [竹部 2014]。これらの揚陸海域が、消費地と生産地の途上にある点は興味深い。

## 参考文献

- 相羽重徳 2003 「越中瀬戸広口壺に関する素描」『研究紀要』第 4 号 (財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 相羽重徳 2014 「第 IV 章まとめ 2 各時代の海揚がり品 D 中世」『日本海に沈んだ陶磁器 新潟県内海揚がり品の実態調査』新潟県海揚がり陶磁器研究会
- 安藤正美 2014 「第 IV 章まとめ 2 各時代の海揚がり品 E 近世」『日本海に沈んだ陶磁器 新潟県内海揚がり品の実態調査』新潟県海揚がり陶磁器研究会
- 石黒半月 1913 『笹岡村誌』 笹岡村
- 加藤 学ほか 2003 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 128 集 仲田遺跡』 新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤由美子・小林ひろ子・竹部佑介 2018 「長岡・出雲崎地域で新たに確認された海揚がり品」『長岡市立科学博物館 研究報告』第 53 号 長岡市立科学博物館
- 金子拓男・高橋陽子 1977 「IV 寺泊タラバ揚陸土器」『寺泊・出雲崎』新潟県文化財年報第 16 新潟県教育委員会
- 鶴巻康志・水澤幸一 2003 「9 至徳寺遺跡（至徳寺館跡・至徳寺跡）」『上越市史叢書 8 考古－中・近世資料－』上越市
- 佐藤友子ほか 2015 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 251 集 清水田遺跡』 新潟県教育委員会・(公財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 閔 雅之 2000 『新潟県潟東村所蔵の考古資料整理報告—谷川忠壽美氏収集資料の調査記録—』 潟東村教育委員会
- 閔根達人・木戸奈央子 2018 「越後産焼酎徳利（「松前徳利」）の生産と流通」『中近世陶磁器の考古学』第 8 卷

- 佐々木達夫編 雄山閣
- 高橋 保ほか 2006『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第157集 住吉遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 竹部佑介 2014「第IV章まとめ3海揚がりの珠洲焼における加飾法」『日本海に沈んだ陶磁器 新潟県内海揚がり品の実態調査』 新潟県海揚がり陶磁器研究会
- 寺崎裕助ほか 2014『日本海に沈んだ陶磁器 新潟県内海揚がり品の実態調査』 新潟県海揚がり陶磁器研究会
- 寺村光晴・久我 勇 1960『寺泊乃おいたち 先史遺跡について』 寺泊町教育委員会
- 田海義正 2019「新潟県名立沖海揚がり備後尾道の酢徳利」『研究紀要』第10号 (公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 戸根与八郎 1991「中世編第5章寺泊タラ場揚陸土器」『寺泊町史』資料編1 原始・古代・中世 寺泊町
- 新潟市 1994「山木戸遺跡」『新潟市史 資料編1 原始古代中世』 新潟市
- 橋本博文 2009「新潟大学考古学研究室 2008年佐渡調査報告 8) 調査成果のまとめ 3. 弥生時代～古代」『佐渡・越後文化交流史研究』第9号 新潟大学大学院現代社会文化研究科・新潟大学人文学部プロジェクト佐渡・越後の文化交流史研究
- 水澤幸一 1999『新潟県北蒲原郡中条町 下町・坊城遺跡Ⅲ～A 地点の調査～』 中条町埋蔵文化財調査報告第18集 中条町教育委員会
- 水澤幸一 2001『新潟県北蒲原郡中条町 下町・坊城遺跡V』 中条町埋蔵文化財調査報告第21集 中条町教育委員会
- 水澤幸一 2005『新潟県北蒲原郡中条町 下町・坊城遺跡VI～D 地点、坊城館の調査～』 中条町埋蔵文化財調査報告 第33集 中条町教育委員会
- 室岡 博 1972「名立沖海底遺跡」『頸城地方の海と海底・海浜遺跡』上越市立総合博物館教養選書第一篇 上越市立総合博物館
- 吉岡康暢 1994『中世須恵器の研究』 吉川弘文館